

奈良・藤原宮跡
ふじわらきゅう

- 1 所在地 奈良県橿原市高殿町
- 2 調査期間 一 二〇〇四年(平16)一〇月～二〇〇五年一月、
二 二〇〇五年一月～二〇〇六年一月
- 3 発掘機関 奈良文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部
- 4 調査担当者 一 代表 金子裕之・安田龍太郎
二 代表 安田龍太郎
- 5 遺跡の種類 宮殿・官衙跡
- 6 遺跡の年代 七世紀末～八世紀初頭、九世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要
一 第一三六次調査
一九九九年より実施している藤原宮跡大極殿・朝堂院地区における再調査の八回目である。今回の調査地は朝堂院東第六堂にあたり、調査面積は二〇六二㎡である。
主な検出遺構は、藤原宮直前期における掘立柱建物、東第六堂とその関連遺構、平安初期の屋敷地などである。
東第六堂は東西棟切妻造の瓦葺き礎石建物で、桁行一二間(二四尺等間、約四九・三m) 梁行四間(身舎一〇尺等間、南北両廂の出各九尺、約一一・二m)である。建設に際しては、基壇予定地をめぐるよう

に、幅五〇cm深さ五〇cm前後の溝を掘削している。これらの溝は排水の機能に加え、水を張って建物の水準を得るための機能をもたせた可能性がある。建物が完成すると、溝は人為的に埋め立てられ、基壇外周部全体を整地した後、礫が敷かれている。

木簡は、東第六堂の東側に掘削された南北溝SD一〇二〇三から五点(すべて削層)出土した。SD一〇二〇三は、右に述べた藤原宮造営期に掘削された溝の一つである。共存遺物には、造営廃棄物である大量の瓦片・木材はつり屑などがある。

二 第一三八―二次調査

調査地は藤原宮跡の内裏及び内裏東官衙地区にあたる。市道の拡幅と路肩整備に伴い調査を実施した。調査区は四区に分かれ、発掘総面積は五五九㎡。木簡はC区から出土した。

C区で検出した主な遺構は、内裏東外郭を画する南北堀、南北棟建物、南北溝などである。木簡は藤原宮の南北基幹水路である東大溝SD一〇五から一点出土した。SD一〇五は、幅約四m深さ約七〇cmを測り、東西の護岸に柱もしくは杭を用いた痕跡がある。溝の埋土は三層に分かれ、中・下層は砂や木屑が層状に堆積した状況を示しており、その中に木簡が含まれていた。上層は藤原宮存続時の人為的な埋土で、その上にはガラスが敷かれている。ガラスの下からは藤原宮期の土器が多く出土した。

なお、本調査区外の東大溝SD一〇五からは、過去にも多くの木

簡が出土している（本誌第五・一〇・一一・一二号）。

8 木簡の釈文・内容

一 第一三六次調査

(1) □ □

091

長さ五七mm幅二〇mmの削屑であるが、釈読不能。他の四点はさらに小型で、わずかな墨痕が確認できるにすぎない。

二 第一三八―二次調査

(1)

□ □ □ □ □
〔4〕

(8)×(28)×3 081

横材で、四周欠損。釈読できる文字は、中央下の一字のみ。一見「己」「巳」にみえるが、中に点があること、文字の頭に「ク」のくずしを確認できることなどから「色」と判断した。全体の内容については不明。

9 関係文献

奈良文化財研究所『奈良文化財研究所紀要二〇〇六』（二〇〇六年）
同『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報』二〇（二〇〇六年）

（市 大樹・竹本 晃）

『評制下荷札木簡集成』

（奈良文化財研究所史料第七六冊）の刊行

二〇一〇年ほどの間に飛鳥池遺跡、石神遺跡、飛鳥京跡苑池遺構などから陸続と発見された七世紀の木簡は、律令制形成期の豊かな歴史像を提供してくれている。中でも荷札木簡は、地方支配や収取体制を端的に示す史料として重要である。

本書は、こうした観点から、七世紀の評制下の荷札と判断される三三九点の木簡を国別に集成し、鮮明な写真を提供し、かつ詳細な解説を施したものである。奈良文化財研究所だけでなく、奈良県教育委員会（奈良県立橿原考古学研究所）をはじめ各地の調査機関が担当した調査で出土した木簡も収録しており、木簡調査機関の幅広い連携によって初めて可能になった出版である。収録にあたっては、各機関の責任において釈文の再検討を行ない、最新の成果が収められている。また、七世紀の荷札を総合的に論じた総説を付す。市販は左記の通り。

A4判、カラー図版二葉、図版六四頁、本文一一六頁

定価 五二五〇円（税込み）

東京大学出版会、二〇〇六年五月刊行